

プリントは <https://www.math.sci.hiroshima-u.ac.jp/~takimoto/R7Kai3.html> にも置いてあります。

● \mathbb{R}^n の距離と位相的性質

以下, $n \in \mathbb{N}$ とし, n 個の実数の組 (x_1, \dots, x_n) 全体からなる集合を \mathbb{R}^n と定めます. $\mathbf{x} = (x_1, \dots, x_n)$, $\mathbf{y} = (y_1, \dots, y_n)$ と $\alpha \in \mathbb{R}$ に対して, 和とスカラー倍を

$$\mathbf{x} + \mathbf{y} = (x_1 + y_1, \dots, x_n + y_n), \quad \alpha \mathbf{x} = (\alpha x_1, \dots, \alpha x_n)$$

と定義すると, \mathbb{R}^n は実線形空間をなします. 以下, $\mathbf{0} = (0, \dots, 0)$ と表すことにします¹.

Def. 1 (\mathbb{R}^n のノルム) $\mathbf{x} = (x_1, \dots, x_n) \in \mathbb{R}^n$ に対して

$$|\mathbf{x}| = \sqrt{\sum_{j=1}^n x_j^2} = \sqrt{x_1^2 + \dots + x_n^2}$$

と定め, $|\mathbf{x}|$ を \mathbf{x} の長さまたはノルムと呼ぶ².

Lem. 1 \mathbb{R}^n の元に対しそのノルムを取る写像 $|\cdot|: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ は次の性質を満たす³.

- (i) 任意の $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n$ に対して $|\mathbf{x}| \geq 0$ であり, かつ $|\mathbf{x}| = 0 \iff \mathbf{x} = \mathbf{0}$ が成り立つ.
- (ii) 任意の $\alpha \in \mathbb{R}$ と $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n$ に対して $|\alpha \mathbf{x}| = |\alpha| |\mathbf{x}|$.
- (iii) 任意の $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in \mathbb{R}^n$ に対して $|\mathbf{x} + \mathbf{y}| \leq |\mathbf{x}| + |\mathbf{y}|$. (三角不等式)

問1 上の Lem. 1 を示せ⁴.

Prop. 1 2点 $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in \mathbb{R}^n$ に対して $d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = |\mathbf{x} - \mathbf{y}|$ と定義すると, 写像 $d: \mathbb{R}^n \times \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ は距離の公理を満たす. 即ち,

- (i) (非負値性) 任意の $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in \mathbb{R}^n$ に対して $d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) \geq 0$ であり, かつ $d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = 0 \iff \mathbf{x} = \mathbf{y}$ が成り立つ.
- (ii) (対称性) 任意の $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in \mathbb{R}^n$ に対して $d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = d(\mathbf{y}, \mathbf{x})$.
- (iii) (三角不等式) 任意の $\mathbf{x}, \mathbf{y}, \mathbf{z} \in \mathbb{R}^n$ に対して $d(\mathbf{x}, \mathbf{z}) \leq d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) + d(\mathbf{y}, \mathbf{z})$.

問2 Lem. 1 を用いて Prop. 1 を示せ. (数学通論 I でも学習?)

上で定義した \mathbb{R}^n 上のノルム $|\cdot|$ をユークリッドノルム, 距離 $d(\cdot, \cdot)$ をユークリッド距離と呼びます. $n = 1$ のときは $x \in \mathbb{R}$ のユークリッドノルムは通常絶対値 $|x|$, $x, y \in \mathbb{R}$ のユークリッド距離は $|x - y|$ となります.

¹線形代数ではベクトルを太字で書くということになっているので \mathbf{x} や $\mathbf{0}$ と書いていますが, \mathbb{R}^n の元であることが明らかな場合は x や 0 と表すこともあります (その場合, 0 が実数の 0 なのか零ベクトルなのかは文脈で判断することになります).

²実数の絶対値 $|\cdot|$ と, \mathbb{R}^n の元 (ベクトル) のノルム $|\cdot|$ を同じ記号で書いているので, 混同しないように注意しましょう.

³一般に実線形空間 X に対して, (i)~(iii) を満たすような写像 $|\cdot|$ (ただし \mathbb{R}^n は全て X に置き換える) をノルムと呼びます. ただ, $|\cdot|$ と書くと実数の絶対値と混同しやすいので, ノルムは $\|\cdot\|$ のように二重線で表すことも多いです. (←ただし, 実数の絶対値自身もノルムの一つです)

⁴(iii) の証明にはコーシー・シュワルツの不等式を用います.

Def. 2 (点列の収束) \mathbb{R}^n における点列 $\{\mathbf{x}^{(k)}\}_{k=1}^{\infty}$ が $\mathbf{a} \in \mathbb{R}^n$ に収束する

$$\stackrel{\text{def}}{\iff} \lim_{k \rightarrow \infty} d(\mathbf{x}^{(k)}, \mathbf{a}) = 0. \quad (\text{i.e. } \forall \varepsilon > 0, \exists N \in \mathbb{N} \text{ s.t. } k \geq N \implies d(\mathbf{x}^{(k)}, \mathbf{a}) < \varepsilon.)$$

このとき、 $\lim_{k \rightarrow \infty} \mathbf{x}^{(k)} = \mathbf{a}$ や $\mathbf{x}^{(k)} \rightarrow \mathbf{a} (k \rightarrow \infty)$ などと書く。また、 \mathbf{a} を点列 $\{\mathbf{x}^{(k)}\}_{k=1}^{\infty}$ の極限点と呼ぶ。

Rem. 先程注意したとおり、 $n = 1$ のときは $d(x, y) = |x - y| (x, y \in \mathbb{R})$ ですから、点列（といっても各項は実数ですので数列） $\{x^{(k)}\}_{k=1}^{\infty}$ が $a \in \mathbb{R}$ に収束することは

$$\forall \varepsilon > 0, \exists N \in \mathbb{N} \text{ s.t. } k \geq N \implies |x^{(k)} - a| < \varepsilon$$

となって、1年生の時に学んだ数列の収束の定義と一致します。

Prop. 2 \mathbb{R}^n の点列 $\{\mathbf{x}^{(k)}\}$ が収束するとき、 $\{\mathbf{x}^{(k)}\}$ の極限点はただ一つである。

Prop. 2 の証明において、 $d(\mathbf{x}, \mathbf{y})$ の具体的な形 $d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = |\mathbf{x} - \mathbf{y}| = \sqrt{\sum_{j=1}^n (x_j - y_j)^2}$ は用いていません。用いたのは前ページの距離の公理 (i)~(iii) だけです。即ち、**Prop. 2 は (ユークリッド距離でなくても) \mathbb{R}^n 上のどんな距離を考えても成立することが分かります。** 実際、 \mathbb{R}^n 上の距離としては、ユークリッド距離以外にも

$$d_1(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sum_{j=1}^n |x_j - y_j|, \quad d_{\infty}(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \max_{j=1, \dots, n} |x_j - y_j|$$

(ただし、 $\mathbf{x} = (x_1, \dots, x_n), \mathbf{y} = (y_1, \dots, y_n) \in \mathbb{R}^n$) などいろいろあります。しかし、ユークリッド距離 $d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \sqrt{\sum_{j=1}^n (x_j - y_j)^2}$ は \mathbb{R}^n の内積から決まる距離という特別な性質を持っており、解析を学ぶ上では使い勝手が良いこともあるので、**今後は \mathbb{R}^n の距離といえばユークリッド距離を用いることにします。**

Rem. 上で定義された \mathbb{R}^n 上の距離 d_1, d_{∞} は、それぞれ \mathbb{R}^n 上のノルム

$$|\mathbf{x}|_1 = \sum_{j=1}^n |x_j|, \quad |\mathbf{x}|_{\infty} = \max_{j=1, \dots, n} |x_j| \quad (\mathbf{x} = (x_1, \dots, x_n))$$

から導かれる距離になっています。実は、「有限次元線形空間上のノルムは全て同値である」という定理があり、その帰結として d, d_1, d_{∞} のどれかの距離で収束すれば、他の距離でも収束していることが言えます。即ち、この三つのどの距離を用いても、収束に関する議論を行う際には違いはないこととなります⁵。

Prop. 3

(1) 収束する点列 $\{\mathbf{x}^{(k)}\}$ は有界である。即ち、 $\exists M > 0$ s.t. $\forall k \in \mathbb{N}, |\mathbf{x}^{(k)}| \leq M$ が成立する。

(2) 収束する点列 $\{\mathbf{x}^{(k)}\}_{k=1}^{\infty}$ の任意の部分点列 $\{\mathbf{x}^{(k_i)}\}_{i=1}^{\infty}$ は同じ極限点に収束する。

⁵数学通論 I で学ぶ言葉を用いれば、「どの距離から導入される位相も等しい」ということです。

問3 Prop. 3 を示せ.

Prop. 4 $\mathbf{x}^{(k)} = (x_1^{(k)}, \dots, x_n^{(k)})$, $\mathbf{a} = (a_1, \dots, a_n)$ とおくととき,

$$\lim_{k \rightarrow \infty} \mathbf{x}^{(k)} = \mathbf{a} \iff \lim_{k \rightarrow \infty} x_j^{(k)} = a_j \quad (\forall j \in \{1, \dots, n\}).$$

pf. \implies の証明には

$$|x_j^{(k)} - a_j| = \sqrt{(x_j^{(k)} - a_j)^2} \leq \sqrt{\sum_{j=1}^n (x_j^{(k)} - a_j)^2} = d(\mathbf{x}^{(k)}, \mathbf{a})$$

を用いる. 詳しくは各自に任せる. ■

問4 Prop. 4 の証明を完成させよ.

Def. 3 (コーシー列) \mathbb{R}^n における点列 $\{\mathbf{x}^{(k)}\}_{k=1}^{\infty}$ が**コーシー列**である

$$\iff \text{「}\forall \varepsilon > 0, \exists N \in \mathbb{N} \text{ s.t. } k, \ell \geq N \implies d(\mathbf{x}^{(k)}, \mathbf{x}^{(\ell)}) < \varepsilon.\text{」}$$

(これを $\lim_{k, \ell \rightarrow \infty} d(\mathbf{x}^{(k)}, \mathbf{x}^{(\ell)}) = 0$ とも書く)

Prop. 5 $\{\mathbf{x}^{(k)}\}$ を \mathbb{R}^n の点列とする.

(1) $\{\mathbf{x}^{(k)}\}$ が収束列 $\implies \{\mathbf{x}^{(k)}\}$ がコーシー列⁶.

(2) $\mathbf{x}^{(k)} = (x_1^{(k)}, \dots, x_n^{(k)})$ とおくととき,

$\{\mathbf{x}^{(k)}\}$ が \mathbb{R}^n の距離 d に関してコーシー列

$$\iff \text{任意の } j \in \{1, \dots, n\} \text{ に対して数列 } \{x_j^{(k)}\} \text{ が } \mathbb{R} \text{ のコーシー列}$$

問5 Prop. 5 を示せ.

実数 \mathbb{R} に関しては, 次の2つの性質が成立していることを解析学 I で学びました.

(1) **(ボルツァノ・ワイエルシュトラスの定理)**

有界な数列 $\{a_n\}_{n=1}^{\infty} \subset \mathbb{R}$ は必ず収束する部分列 $\{a_{n_k}\}_{k=1}^{\infty}$ を含む.

(2) **(実数の完備性)** 任意の \mathbb{R} におけるコーシー列は収束する.

これと同様の性質は \mathbb{R}^n に対しても成立します.

Th. 1

(1) **(ボルツァノ・ワイエルシュトラスの定理)**

\mathbb{R}^n 内の有界な点列 $\{\mathbf{x}^{(k)}\}_{k=1}^{\infty}$ は必ず収束する部分列 $\{\mathbf{x}^{(k_i)}\}_{i=1}^{\infty}$ を含む.

(2) **(\mathbb{R}^n の完備性)** 任意の \mathbb{R}^n におけるコーシー列は収束する.

⁶この性質は \mathbb{R}^n に限らず, あらゆる距離空間で成立します. しかし, 逆は必ずしも成立するとは限りません. 逆が成立するような (即ち, 任意のコーシー列が収束するような) 距離空間は**完備**であると呼びます.

pf. (2)のみ示す. 任意にコーシー列 $\{\mathbf{x}^{(k)}\} \subset \mathbb{R}^n$ を取る. このとき, ある $\mathbf{a} \in \mathbb{R}^n$ が存在して $\lim_{k \rightarrow \infty} \mathbf{x}^{(k)} = \mathbf{a}$ となることを示す.

Prop. 5 (2) より, 任意の $j \in \{1, \dots, n\}$ に対して数列 $\{x_j^{(k)}\}$ が \mathbb{R} のコーシー列である. 従って実数の完備性より, 任意の $j \in \{1, \dots, n\}$ に対して, ある $a_j \in \mathbb{R}$ が存在して $\lim_{k \rightarrow \infty} x_j^{(k)} = a_j$ が成立する.

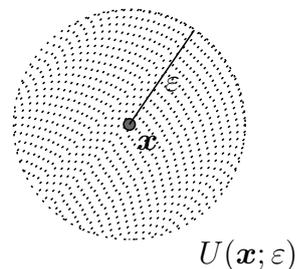
ここで $\mathbf{a} = (a_1, \dots, a_n) \in \mathbb{R}^n$ とおくと, Prop. 4 より $\lim_{k \rightarrow \infty} \mathbf{x}^{(k)} = \mathbf{a}$ である. ■

次に \mathbb{R}^n の位相的性質について述べます. しばらくは \mathbb{R}^n だけでなく一般の距離空間に対しても同様に定義される概念, および同様に証明できる命題を述べます.

Def. 4 (ε -近傍) $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n, \varepsilon > 0$ に対して,

$$U(\mathbf{x}; \varepsilon) = \{\mathbf{y} \in \mathbb{R}^n \mid d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) < \varepsilon\}$$

を, 点 \mathbf{x} の ε -近傍と呼ぶ⁷.



集合 $A \subset \mathbb{R}^n$ が**有界**であるとは, $\exists M > 0$ s.t. $\forall \mathbf{x} \in A, |\mathbf{x}| \leq M$ が成り立つことを言いますが, これを Def. 4 で定義した記号を用いると

$$\exists M > 0 \text{ s.t. } \forall \mathbf{x} \in A, \mathbf{x} \in U(\mathbf{0}; M),$$

即ち,

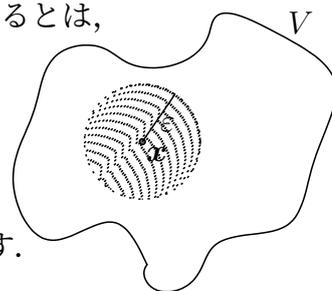
$$\exists M > 0 \text{ s.t. } A \subset U(\mathbf{0}; M)$$

となります⁸.

Def. 5 (近傍) $V \subset \mathbb{R}^n, \mathbf{x} \in \mathbb{R}^n$ に対して, V が \mathbf{x} の**近傍**であるとは,

$$\exists \varepsilon > 0 \text{ s.t. } V \supset U(\mathbf{x}; \varepsilon)$$

が成り立つことを言う⁹.



以下, $A \subset \mathbb{R}^n$ に対し A^c で A の補集合 ($= \mathbb{R}^n \setminus A$) を表します.

Def. 6 (内点, 外点, 境界点) $A \subset \mathbb{R}^n, \mathbf{x} \in \mathbb{R}^n$ に対し,

- (1) \mathbf{x} が A の**内点** $\stackrel{\text{def}}{\iff} \exists \delta > 0$ s.t. $U(\mathbf{x}; \delta) \subset A$.
- (2) \mathbf{x} が A の**外点** $\stackrel{\text{def}}{\iff} \exists \delta > 0$ s.t. $U(\mathbf{x}; \delta) \subset A^c$.
- (3) \mathbf{x} が A の**境界点** $\stackrel{\text{def}}{\iff} \forall \varepsilon > 0, U(\mathbf{x}; \varepsilon) \cap A \neq \emptyset$ かつ $U(\mathbf{x}; \varepsilon) \cap A^c \neq \emptyset$.

⁷数学通論 I の講義, および解析学 III の教科書では \mathbf{x} の ε -近傍 を $U(\mathbf{x}; \varepsilon)$ と書いているのでこの補足プリントでもそれに倣っていますが, 解析では $B(\mathbf{x}, \varepsilon)$ や $B_\varepsilon(\mathbf{x})$ と書くことも多いです. 図形的には「中心が \mathbf{x} , 半径 ε の開円板 (3次元であれば球)」になるわけで, B は Ball (球) の頭文字という気持ちです. 実際, **開球**という言葉遣いをする場合もあります.

⁸集合の包含関係 $A \subset B$ は「 $x \in A \implies x \in B$ 」または「 $\forall x \in A, x \in B$ 」を意味していたことに注意.

⁹ V が \mathbf{x} の近傍ならば, 必然的に $\mathbf{x} \in V$ であることに注意.

Rem. (i) x が A の内点ならば, $x \in A$ です.

(ii) x が A の外点ならば, $x \in A^c$ です.

(iii) 「 x は A の内点」「 x は A の外点」「 x は A の境界点」のいずれか一つのみが成立します.

Def. 7 (触点, 集積点, 孤立点)

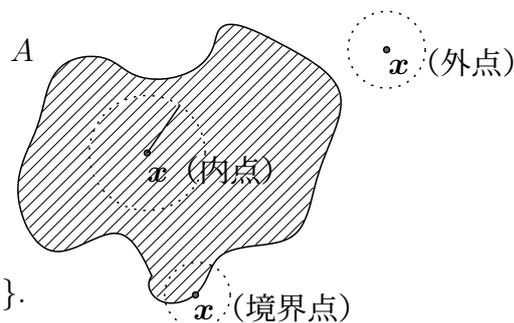
$A \subset \mathbb{R}^n, x \in \mathbb{R}^n$ に対し,

(4) x が A の触点 $\stackrel{\text{def}}{\iff} \forall \varepsilon > 0, U(x; \varepsilon) \cap A \neq \emptyset$.

(5) x が A の集積点

$\stackrel{\text{def}}{\iff} \forall \varepsilon > 0, U(x; \varepsilon) \cap (A \setminus \{x\}) \neq \emptyset$.

(6) x が A の孤立点 $\stackrel{\text{def}}{\iff} \exists \delta > 0 \text{ s.t. } U(x; \delta) \cap A = \{x\}$.



Rem. (iv) x は A の触点 $\stackrel{\text{同値}}{\iff} x$ は A の内点または A の境界点

$\stackrel{\text{同値}}{\iff} x$ は A の外点ではない

$\stackrel{\text{同値}}{\iff} x \in A$ または x は A の集積点

(v) x が A の内点ならば, x は A の集積点です.

(vi) x が A の孤立点 $\stackrel{\text{同値}}{\iff} x$ は A の境界点であり, かつ A の集積点でない.

(vii) x が A の外点ならば, x は A の集積点でも孤立点でもありません.

(viii) x が A の集積点 $\stackrel{\text{同値}}{\iff}$ ある A の点からなる点列 $\{x^{(k)}\}$ が存在して, $x^{(k)} \neq x (\forall k \in \mathbb{N})$ かつ $\lim_{k \rightarrow \infty} x^{(k)} = x$ が成立する.

Def. 8 (内部, 外部, 境界, 閉包) $A \subset \mathbb{R}^n$ とする.

(1) $\{x \in \mathbb{R}^n \mid x \text{ は } A \text{ の内点}\}$ を A の内部 (開核) と呼び, A° や $\text{int } A$ で表す.

(2) $\{x \in \mathbb{R}^n \mid x \text{ は } A \text{ の外点}\} (= (A^c)^\circ)$ を A の外部と呼び, A^e で表す.

(3) $\{x \in \mathbb{R}^n \mid x \text{ は } A \text{ の境界点}\}$ を A の境界と呼び, ∂A で表す.

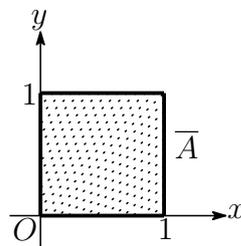
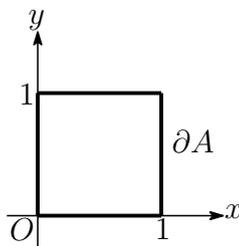
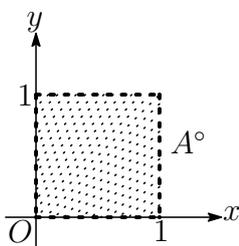
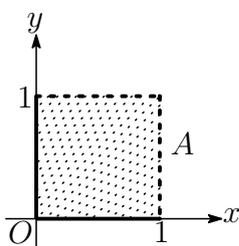
(4) $\{x \in \mathbb{R}^n \mid x \text{ は } A \text{ の触点}\} = A^\circ \cup \partial A (= \mathbb{R}^n \setminus A^e)$ を A の閉包と呼び, \bar{A} で表す.

Ex. $A = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid 0 \leq x < 1, 0 \leq y < 1\}$ とすると,

• $A^\circ = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid 0 < x < 1, 0 < y < 1\}$.

• $\partial A = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid 0 \leq x \leq 1, y = 0\} \cup \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid 0 \leq x \leq 1, y = 1\}$
 $\cup \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid x = 0, 0 \leq y \leq 1\} \cup \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid x = 1, 0 \leq y \leq 1\}$.

• $\bar{A} = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid 0 \leq x \leq 1, 0 \leq y \leq 1\}$.



問6 上で述べた事実を証明せよ.

Def. 9 (開集合, 閉集合) $A \subset \mathbb{R}^n$ とする.

- (1) A が \mathbb{R}^n の 開集合 $\stackrel{\text{def}}{\iff} \forall \mathbf{x} \in A, \exists \delta > 0 \text{ s.t. } U(\mathbf{x}; \delta) \subset A$.
- (2) A が \mathbb{R}^n の 閉集合 $\stackrel{\text{def}}{\iff} A^c$ が \mathbb{R}^n の開集合.

Ex. (1) $A_1 = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid 0 < x < 1, 0 < y < 1\}$ は \mathbb{R}^2 の開集合.

(2) $A_2 = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid 0 \leq x \leq 1, 0 \leq y \leq 1\}$ は \mathbb{R}^2 の閉集合.

(3) $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n, \varepsilon > 0$ に対して, $U(\mathbf{x}; \varepsilon)$ は \mathbb{R}^n の開集合.

Prop. 6 $A \subset \mathbb{R}^n$ とする.

- (1) A が \mathbb{R}^n の開集合 $\stackrel{\text{同値}}{\iff} A = A^\circ$.
- (2) $(A^\circ)^\circ = A^\circ$
- (3) A°, A^c は \mathbb{R}^n の開集合であり, $\partial A, \bar{A}$ は \mathbb{R}^n の閉集合である.
- (4) $A^\circ \subset A \subset \bar{A}$.

Prop. 7 $A \subset \mathbb{R}^n, \mathbf{a} \in \mathbb{R}^n$ に対し, 次の (a) と (b) は同値である.

- (a) $\mathbf{a} \in \bar{A}$.
- (b) ある A の点からなる点列 $\{\mathbf{x}^{(k)}\}$ が存在して, $\lim_{k \rightarrow \infty} \mathbf{x}^{(k)} = \mathbf{a}$.

Prop. 8 $A \subset \mathbb{R}^n$ に対し, 次の (a)~(d) は同値である.

- (a) A は \mathbb{R}^n の閉集合である. (b) $\bar{A} = A$.
- (c) $\{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid \mathbf{x} \text{ は } A \text{ の集積点}\} \subset A$ が成立する.
- (d) A の点からなる任意の収束点列 $\{\mathbf{x}^{(k)}\}$ の極限点 \mathbf{a} は必ず A に属している.

問7 Prop. 6, Prop. 7, Prop. 8 を証明せよ.

最後に, \mathbb{R}^n の有界閉集合に対して成立する重要な性質を述べます. この定理はユークリッド空間 \mathbb{R}^n に対して成立するものであり, 一般の距離空間に対しては必ずしも成立しません.

Th. 2 (コンパクト性) $A \subset \mathbb{R}^n$ とする. このとき, (a)~(c) は同値である.

- (a) A は有界閉集合である.
- (b) (点列コンパクト性) A の点からなる任意の点列 $\{\mathbf{x}^{(k)}\}_{k=1}^\infty$ は, A の点に収束する部分列 $\{\mathbf{x}^{(k_i)}\}_{i=1}^\infty$ を必ず含む.
- (c) (コンパクト性) A の任意の開被覆 $\{U_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ に対して, ある有限個の $\lambda_1, \dots, \lambda_N \in \Lambda$ が存在して $\bigcup_{j=1}^N U_{\lambda_j} \supset A$ となる¹⁰.

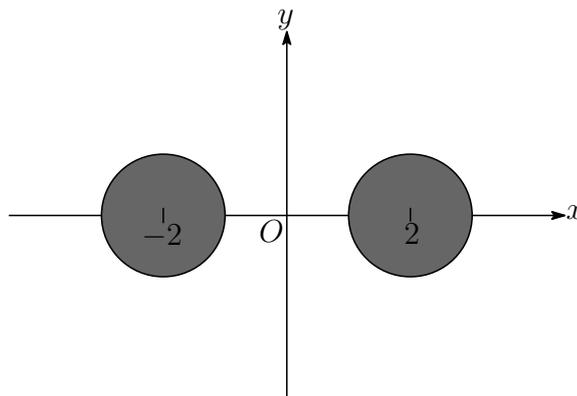
Rem. Th. 2 の (a) \iff (c) の証明については, 詳しくは数学通論 I の講義で学習したことでしよう. (a) \iff (b) の証明もできるようにしてください. 例えば, (a) \implies (b) は Th. 1 (1) と Prop. 8 を用いて示すことができます.

¹⁰ 「 $\{U_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ が A の開被覆である」とは, 任意の $\lambda \in \Lambda$ に対して U_λ は \mathbb{R}^n の開集合であり, かつ $\bigcup_{\lambda \in \Lambda} U_\lambda \supset A$ であることを言います.

Def. 10 (連結でない集合) $A \subset \mathbb{R}^n$ が連結でない集合

- $\stackrel{\text{def}}{\iff} \exists U_1, U_2 : \mathbb{R}^n$ の開集合 s.t.
- (i) $U_1 \cap A \neq \emptyset, U_2 \cap A \neq \emptyset$.
 - (ii) $U_1 \cap U_2 \cap A = \emptyset$.
 - (iii) $(U_1 \cap A) \cup (U_2 \cap A) = A$.

Ex. $A = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid (x+2)^2 + y^2 \leq 1\} \cup \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid (x-2)^2 + y^2 \leq 1\}$ は連結でない。なぜならば, $U_1 = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid x < 0\}, U_2 = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid x > 0\}$ とおけばよいからである。



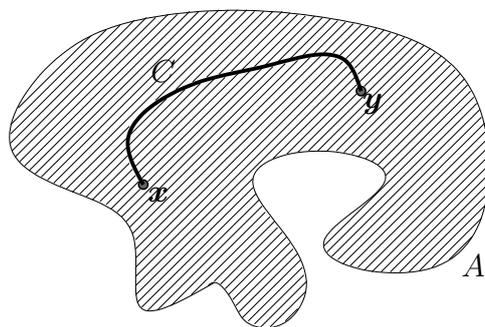
Def. 11 (連結集合) $A \subset \mathbb{R}^n$ が「連結でない」集合ではないとき, A は連結な集合であるという。

Def. 12 (弧状連結集合) $A \subset \mathbb{R}^n$ が弧状連結な集合

$\stackrel{\text{def}}{\iff}$ 任意の 2 点 $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in A$ に対して, ある連続曲線

$$C : x_1 = \varphi_1(t), \dots, x_n = \varphi_n(t) \quad (t \in [0, 1])$$

が存在して $\{(\varphi_1(t), \dots, \varphi_n(t)) \in \mathbb{R}^n \mid t \in [0, 1]\} \subset A$ かつ $\mathbf{x} = (\varphi_1(0), \dots, \varphi_n(0)), \mathbf{y} = (\varphi_1(1), \dots, \varphi_n(1))$ が成立する。



Th. 3 $A \subset \mathbb{R}^n$ が開集合ならば,

$$A \text{ が連結} \stackrel{\text{同値}}{\iff} A \text{ が弧状連結.}$$

Rem. Th.3 の証明は数学通論 II で行うと思いますので, 解析学 III では証明せずにこの性質を用いることとします。

Def. 13 (領域, 閉領域)

- (1) (弧状) 連結な開集合のことを**領域**と呼ぶ.
- (2) $A \subset \mathbb{R}^n$ が**閉領域** $\stackrel{\text{def}}{\iff} \exists B \subset \mathbb{R}^n : \text{領域 s.t. } A = \overline{B}$.

Rem. A が領域ならば, その閉包 \overline{A} は閉領域となります.